

自然・食・文化が固有の地域ブランド 木のまち、魚のまちの元気を全国発信

古来続く「木のまち、魚のまち」

尾鷲市公式サイトへの入口はユニークで楽しい。「今の季節はこんな魚泳いどるんやで」という尾鷲弁のタイトルの下に、尾鷲の海で獲れる旬の魚介の写真(簡単な解説付き)が右から左に、まるで黒潮に乗っているかのように流れてくる。そして画面右上に「尾鷲の観光情報を見る」「行政のサイトを見る」「防災情報を見る」という3つの主要窓がさりげなく設けられ、閲覧者はあたかも物語の表紙をめくるように、サイト上に展開する各情報ページに導かれていく。

林業・漁業・観光を基幹産業とし、「木のまち、魚のまち」として全国発信する尾鷲市の特徴が、手づくり感あふれる手法で端的に表現されているのだ。同時に昔から幾多の自然災害に見舞われてきた尾鷲市にとって、「災害対策(防災への取り組み)」がいかに重要懸

案事項であるかも象徴的に示されている。

また行政サイトには名物コーナー「三日に一魚」がある。軽妙洒落なこの連載エッセイの筆者は、岩田昭人・尾鷲市長だ。尾鷲市を象徴する魚はブリだが、沖合底引き網漁業や定置網漁業が盛んで、深海魚も含め多種多様な魚介が獲れる。生まれ育った尾鷲の魚介を心から愛する岩田市長は、三重県職員時代に「一日一魚」と題するエッセイを県公式サイトで連載した。地元漁港や市場に毎朝出向き、水揚げされた魚介の中から気に入ったものを一種類ずつ、写真付きで紹介するページだ。県職員を早期退職し、数年後に尾鷲市長に就任することになってからは、多忙のため「三日に一魚」と衣替えして連載再開。現在に至っている。それにしても県職員時代を含め、延べ800種以上の尾鷲の魚介を紹介してきたというから凄い。

「尾鷲市は昨年6月に市制60周年、7月に熊野古道世界遺産登録10周年を迎えました。尾

いわたあきひと
岩田昭人
尾鷲市長



鷲の特徴を一言で表せば、昔から

今に至るまで『木のまち、魚の

まち』であり続けていること。尾鷲市では現在、その豊かな海や山の地域資源をフル活用するために、農商工との連携による6次産業化をはじめ、『食』を媒介とする産業振興、広い意味での地域振興を積極的に行う『食のまちづくり』を展開しております。『三日に一魚』の連載も、自分なりの発信活動の一環として、



日本3大鱈漁場といわれる尾鷲の定置網漁(写真は早田大敷)

続けさせてもらっています」。岩田市長は楽しみにそう語る。

三重県南部・東紀州地域のほぼ中央に位置する尾鷲市は、市域西部が大台山系を挟んで奈良県と接し、東部は黒潮(暖流)流れる太平洋(熊野灘)に面している。黒潮の影響で気候は年間を通して温暖多雨。植物も魚介もすくすく育つ環境が醸し出され、尾鷲ヒノキを象徴とする林業、ブリをはじめ多様な魚介を産する漁業は古来、尾鷲の地場産業を形成してきた。

リアス式海岸の多い尾鷲市の沿岸部にはいくつかの港がある。沖合底引き網漁業・定置網漁業のほか、近年は全国ブランドにも成長

したマダイなどの海面養殖を中心に、「つくり育てる漁業」にも力を入れている。

一方の尾鷲ヒノキは「鮮やかな赤みと強靱な良質の材木」(尾鷲市HP「尾鷲市の概要」より)が全国的に知られ、押しも押されぬしいトップブランドとなっている。

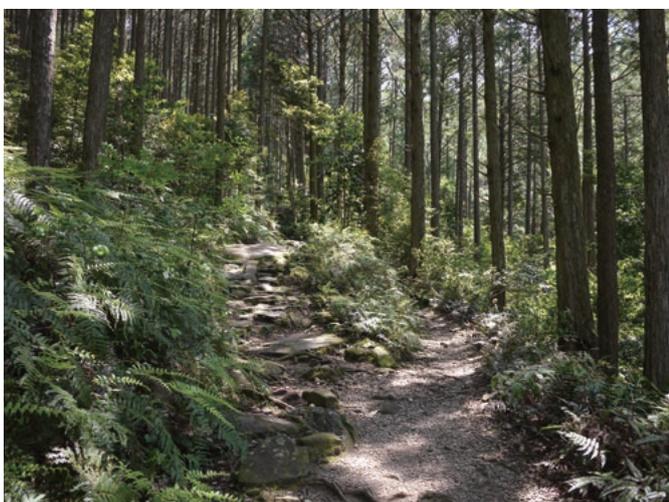
世界遺産に登録された熊野古道も含め、尾鷲市にはこれだけ際立った発信素材が豊富にある。にもかかわらず、昭和30年代以降の地域経済の一翼を担った火力発電所の規模縮小などもあって、長年にわたる人口減少が続き、徐々に全体的な活力が失われてきた。

そんな尾鷲市の再活性化への推進エンジンには「木のまち、魚のまち」、とりわけ質量豊富な「食」の全国発信をおいてほかにない。そんな強い決意の下に、岩田市長は平成21年の市



戦国武将の立ち合いの声に由来し、300年以上続く「ヤイヤ祭り」(2月)

長就任後にすぐ、漁業振興および林業振興とその関連業務を担う部署を「魚まち推進課」「木のまち推進課」に統合改称し、再活性化に



苔むした石畳から陽光あふれる尾根道まで、多彩な景観の熊野古道(馬越峠付近)

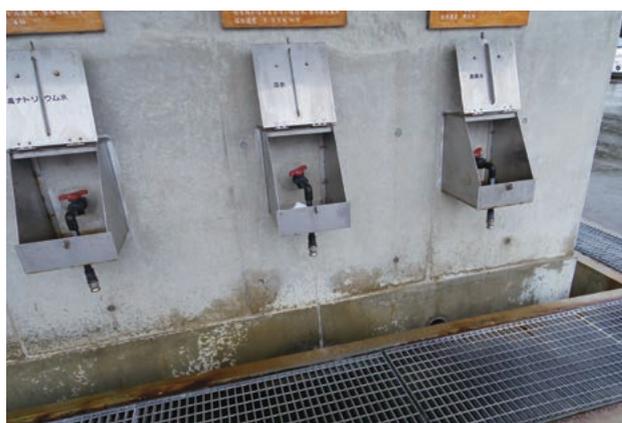




後継者づくりの一環、漁師さん指導のアオリイカ産卵床製作体験



コアなファンも多い早田地区名物の「寒ブリまつり」(2月)



個人でも業者でも多彩な濃度・成分の海洋深層水を利用できる取水総合交流施設アクアステーション

着手した。

木のまち推進課は現在も残るが、魚まち推進課は、「第6次総合計画」(平成24年度)とその実践計画ともいふべき「尾鷲市『食』のまちづくり基本計画」(平成26年度)の策定とともに、水産関係・商工関係・観光関係を包含する「水産商工食のまち課」を設置。市長の発言にもあった「海・山の地域資源をフル活用し、農商工との連携による、産業振興を含めた、広い意味での地域振興を推進する『食』のまちづくり」の中心的役割を担うこととなった。

すべてを包含する『食』のまちづくり

「尾鷲市が現在実施している第6次総合計画の最重点施策の一つは『おわせ人づくり』で

す。おわせ人というのは尾鷲の地域を支える人、次代を担う人、産業を支える人などを指し、それらの人づくりを『食』にまつわるあらゆる事業や活動を通して推進する。同時に住みよいまちづくり、観光振興(交流人口の増加)、健康長寿促進、新たな定住人口の増加など、地域活性化に不可欠なあらゆる要素の元気づくりを推進しようとする取り組みなのです」(岩田市長)

尾鷲の地域資源である「食」をテーマとして、重要な推進エンジンに位置付け、地域の元気を取り戻そうというのだ。

「この取り組みを進めるにはまず、尾鷲の食を磨き上げ、地域内外の皆さんに発信し、提供し、楽しんでいただくことで、地域にお金を循環させ、経済活性化の起爆剤にすると

れる産物の6次産業化および、物産と観光振興との密接な連携事業、それらの積極的な情報発信事業などが挙げられる。例えば尾鷲市の近年重要な産業の一つに育ちつつある事例として、海洋深層水を活用した諸事業がある。尾鷲市沖で採れる良質の海洋深層水(みえ尾鷲海洋深層水)は今や、水産業、食品・飲料、医療・美容・健康分野などの幅広い産業に活用されるようになり、全国的な注目を集めている。

さらに海洋深層水を活用した人気の温浴施設「夢古道の湯」と、「夢古道おわせ」で提供するランチバイキングも地元の食材を活用して好評だ。みえ尾鷲海洋深層水はそのほか、廃校になった小学校校舎を活用した民間企業(株式会社モクモクしお学舎)による製塩事業

いう攻めの姿勢が必要だ。同時に市民の皆さんには、尾鷲の食の魅力を活用しながらライフステージに応じた食育活動などを実施し、尾鷲ならではの食によるまちづくり、おわせ人づくりを推進するという意味で、尾鷲を食で守ろうという姿勢も込めさせてもらっています」(岩田市長)

具体的な事業としては、まず海・山から生ま

尾鷲市

市 政 ル ポ

(三重県)

と、それに伴う数々の塩製品の生産へと発展している。

また「ふるさと納税」の返礼品としても、尾鷲の海で獲れる多彩な魚介は目玉商品だ。海洋深層水を使った水産加工品やジャム、天然果汁100%の甘夏ジュースなどの人気も高い。

尾鷲の海・山・里の味覚を季節ごとに届けて好評な「尾鷲まるごとヤーヤ便」の売り上げと、ふるさと納税の金額を総合すると年間1億円程がコンスタントに見込めるようになってきている。

さらに交流人口拡大のための取り組みとして、中心市街地で展開している「尾鷲よいとこ定食」(19軒が参加中)は、尾鷲の食材を活用した非常にお得な定食企画で、人気が高い。まちなかを歩きながら尾鷲の味覚を楽しめる「おわせ棒」(魚介

のフライや練り製品、珍味、栗むし羊羹や団子などを棒に刺したファストフード)や、尾鷲のまち歩きをより楽しむためのヒット商品も生まれている。

観光振興に関連するこうした積極的な「食」の取り組みを裏支えているのが、昨年3月に全線開通した全長55・3kmの紀勢自動車



海洋深層水を活用して人気の温浴施設・夢古道の湯

道の存在だ。紀勢自動車道は東紀州地域の人々にとって、災害時には外部と直結する「命の道」であり、名古屋圏や関西圏、京都・津市と東紀州一帯が直結する待望久しい大動脈でもある。

この紀勢自動車道の全通により、尾鷲市は名古屋市と2時間、津市と1時間で結ばれることとなった。昨年9月に開通した熊野尾鷲道路と合わせ、尾鷲市への交通利便性は飛躍的に増大した。

「紀勢自動車道で尾鷲へドライブに来て、世界遺産・熊野古道をウォーキングして、夢古道の湯の海洋深層水のお風呂に入って疲れを癒し、おわせ棒や尾鷲よいとこ定食で尾鷲の味を楽しみ、海洋深層水などもふんだんに使った各種お土産を持って帰っていただく。

紀勢自動車道・尾鷲北ICや熊野尾鷲道路・尾鷲南ICから市街地



中心市街地の飲食店で提供される「尾鷲よいとこ定食」



尾鷲ヒノキを使った「三重県立熊野古道センター(熊野古道資料館)」



への誘導の方法にまだ課題は残っています。が、紀勢自動車道の全通以来、休日や祝日に尾鷲を訪れ、そんな過ごし方をされる人々が



尾鷲ヒノキの火鉢製作体験(県立熊野古道センターのヒノキふれあいフェスタ)



日本の里100選にも選ばれた尾鷲市の飛び地・須賀利地区

格段に増えているのも事実です(岩田市長)

「食」に守られ、 「食」で攻めるまちづくり

尾鷲市の人口減少化問題は数値だけ見ると確かに差し迫っている。人口減少化問題は全国共通の課題だが、尾鷲市の場合は過去50年間、ほぼ一貫して人口が減り続けている。「日本創成会議(人口減少問題検討分科会)が昨年発表した『消滅可能性の高い都市』にもリストアップされているほど(岩田市長)だ。

ご承知のように「消滅可能性都市」とは2040年(平成52年)までに若年女性の人口が大幅に減少することが予測される都市、「消滅可能性の高い都市」は「消滅可能性都市」の

中で、2040年までに人口1万人を切ることを予測される都市を指す。尾鷲市は東海地方に立地する市で唯一、その「消滅可能性の高い都市」に入られた。

尾鷲市の人口は1万9258人。昭和30年代の3万4000人台をピークに徐々に減り続け、平成25年12月に2万人を切り、今年はさらに300人ほど減少している。高齢化率は平成27年4月1日現在で39・9%に達し、65歳以上の人口が50%を超える限界集落も点在している。

だが市長は危機感を持ちながらも、ピンチをチャンスに捉え、前向きに取り組んでいる。また筆者は沿岸部を中心に幾つかの地区を訪問させていただき、限界集落とされる地区の方々ともお話しする機会を得たが、暗さはまったくといっていいほど感じられなかった。

それはこれまで述べてきたような「攻めの姿勢」が奏功しているということももちろんあるだろう。同時に大都市圏のように多様な

雇用場がないため、働き盛りの人口は減少し続けているものの、尾鷲には昔ながらの基幹産業(林業・漁業)が健在だ。後継者難を除けば、人口が減少化した分、逆に安定した収益になって推移しているともいえる。そんな地域が固有にはぐくんできた基本的な産業構造の健在ぶりが、高齢化の進む市民にとっての心の安定感につながっている部分もあるのではないだろうか。

逆にだからこそ一層、尾鷲市のストロングポイントである「食」を媒介に、尾鷲の良さを守りながらの攻めの姿勢が重要にもなってくる。尾鷲市では限界集落を対象に、地域の良さを再認識するとともに、その利活用を促す事業も折に触れ実施している。代表的な事例は平成24年度〜25年度に、高齢化率65%近い早田地区で、慶應義塾大学との連携で実施された「尾鷲市元氣プロジェクト」だ。ゼミ生が足かけ2年間にわたり、民泊しながら地域の人々と定期的に交流。地域の良さを守りながら新たな付加価値を見出すためのアイデアを協働で考案し、一緒に推進した。特に平成25年度には尾鷲市の進める「食のまちづくり」に合わせ、地域の「食」をテーマに元氣計画を協働で立案。成果はプロジェクトの終了した今も、お弁当事業やお土産づくりなどの活動となって地域に生きている。

早田地区をはじめとする幾つかの集落には、その後も公募で採用した「地域おこし協力隊員」4人が常住し、地域の元気をはぐく

者を出した昭和東南海地震と津波。さらには三陸海岸から東海地方まで大きな被害を出した昭和35年のチリ津波。昭和34年に襲来した史上最大級の台風「伊勢湾台風」は紀伊半島から東海地方にかけて死者5000人以上を出す惨事となった。それらの体験は世代を超えて語り継がれており、将来への戒めとしての役割を果たしている。

「そうした大きな災害だけでなく、尾鷲市は台風や豪雨



伊勢湾台風の後には造られた防潮堤(須賀利地区)



海に山に尾鷲市はウォーキングコースの宝庫(おわせ海・山ツアーウォーク)



交通弱者の足としてフル稼働している「ふれあいバス」

む取り組みを引き続き行っている。

地域固有の歴史・文化を大事に守り育てながら、特に食の部分で新たな価値観を見出すとする元氣プロジェクトの姿勢は、これまで紹介してきた「食」を媒介とするまちづくりの基本姿勢そのものといえる。同時に高齢者の方々も、まさに「おわせ人」の一員であることを内外に示していて、好感を持たずにいられない。

課題への取り組みと元氣を同時発信

既に少し触れたように、尾鷲市は歴史的に多くの自然災害に見舞われてきた。近世の宝永・安政の地震と津波。昭和19年の戦時中に発生し、東海地区全域で1200人以上の死者を出した昭和東南海地震と津波。さらには三陸海岸から東海地方まで大きな被害を出した昭和35年のチリ津波。昭和34年に襲来した史上最大級の台風「伊勢湾台風」は紀伊半島から東海地方にかけて死者5000人以上を出す惨事となった。それらの体験は世代を超えて語り継がれており、将来への戒めとしての役割を果たしている。

のために年間3〜4回は、孤立してしました。紀勢自動車道が昨年全通するまでは、尾鷲市と周辺都市を結ぶ唯一の国道だった42号線が、台風や豪雨のたびに閉鎖されたからです(岩田市長)

そのような折、尾鷲市では熊野古道が避難路になることも珍しくなかったという。背後に山が迫り、入り組んだ海岸線や豊かな外界に面した美しい自然環境に恵まれているがゆえの辛さでもあるが、「命の道」紀勢自動車道・尾鷲北ICと熊野尾鷲道路・尾鷲南ICの間が連結・開通すれば、尾鷲市の災害への備えはさらに強化される。

尾鷲北・尾鷲南の両ICが連結したら、その間に「道の駅」を建設する計画も尾鷲市にはある。国土交通省から「候補地」としてリスト

アップ済みの尾鷲市の道の駅は、近未来の到来が予測される「東南海地震」などの災害時には災害情報センター、復旧の際の物流集散などの拠点として機能する構想だ。

また平時には懸案となっている「高速道路から市街地に誘導するゲートウェイ」(岩田市長)の機能も果たすことになる。

ひとたび旅行でじっくり訪れれば、景観の美しさや人情の濃さ、食の魅力などでリピーターとなる人が続出するといわれる尾鷲市。人口減少化など課題も少なくない。だが課題を克服するための地道な努力とともに、まちを挙げての「食」を媒介にした多彩なまちづくり、人づくりなどへの取り組みにより、常に元氣を全国へと発信し続けている。

(取材・文 遠藤 隆 / 取材日 平成27年5月12日)